



名大祭パンフレット表紙 (第11・12回)

四、時代を映す名大祭②—一九七〇年代

◆第一一回と第二〇回のテーマ

名大祭一覽(②)には、一九七〇年代における名大祭のテーマなどを示しました。一九六〇年代のテーマと比較すると、メインテーマが短くなっている一方で、サブテーマが長くなっています。また、この期間のほとんどのメインテーマでは、「青春」や「歌」がキーワードになっているといえます。

この時期は、いわゆる「大学紛争」が鎮静化した時期にあたります。名古屋大学でも、鶴舞キャンパスでの「医学部紛争」を一つの契機として、東山キャンパスでの「大学紛争」が一九六〇年代末に起こりましたが、この時期にはすでに沈静化していま

名大祭一覧 (2)

回	開催年	開催日	メインテーマ／サブテーマ	名大祭の動き
11	1970年	5/30、6/10～14	変革にいとむ青春／新しい歴史敵愾に迎える我ら 理への情熱を燃やし 統一と国結を鉄炮を鍛えん 怒れ知性燃えあがる日本列島／真理究めるわれら 巻く濁流をついて 平和と民主主義の統一をめざさん	「スポーツ祭典」が「大運動会」に。
12	1971年	6/9～13	高らかに歌え！ 青春の叙事詩／迫りくる嵐そして霧 我ら勇敢な「海つばめ」たらん	「徹夜ステータ祭典」はじまる。運動会が事実上消滅。名大祭統一普及曲の選定がはじまる。山田杯駅伝大会はじまる。
13	1972年	5/28、6/7～11	日々新たなる青春の復讐を／生ける科学の草の根よ 雄々しく育って 行く手を阻む 巨岩を砕け	
14	1973年	6/6～10	大学ににんげんのうたを／それは模索し発展する科学 のうた 語らい呼びかわす連帯のうた 培い勵まし合 い国民のための日本をつくる変革のうた	
15	1974年	6/5～9	ひきしばれ青春の弓／射よ嵐の目に 熱き鋼の矢を	
16	1975年	6/4～8	響け われらのロンド／吹きぬげる科学の烈風 を裂け わきあがれ大地に 建設のエネルギー	
17	1976年	6/9～13	湧きあがれ 学問と変革のソノフオニニー／ひたむきな 歴史の探索と 確信への追求から 今生み出される明 日への飛翔 我が学舎と 当惑する祖国に	第2グリーンソングベルトでグリーンソング祭典復活。
18	1977年	6/8～12	我らの手で真の科学を／我ら数多なる知の泉、歴史の 大河にそそぎ 深き流れとなりて逆流をつき破らん	フェスティバルはじまる。スポーツ祭典復活。
19	1978年	6/7～11		
20	1979年	6/5～10	知を力に 逆風に対峙し奏でよう 変革の前奏曲	『名大生白書』発行はじまる。この年から6日開催となる。全学フェスティバルなくなる。オーケストラフェスティバル、ライナーレフェスティバルはじまる。

(各年の名大祭ソングレットより作成)

した。一九七〇年以降、名大祭のテーマ表現が明らかにそれ以前と異なっている背景には、そうした事情があったといえます。

◆一九七〇年代の名大祭テーマアピール

この時期の名大祭パンフレットに掲載されたテーマアピールに目を向けると、当時の社会情勢やそれに対する学生の認識がとてよく理解できます。以下に、そのいくつかを紹介していきます。

人間らしく生きたい——僕たちはいつもそう思う。人間らしく生きる——こんなあたりまえにみえることが決して容易ではない、僕たちの時代。小学校の門を、小さな胸をふくらませてくぐった、その時に先ず知らされた「できる子」「できない子」という言葉。中学校時代、受験時代の差別と選別の教育のなかで、見えるものに目をつぶり、聞こえるものに耳をふさいで「死なないように生きる」ことを強いられてきた僕たち。……(略)……「青春」と「信頼」、この二つの言葉が持つ、本来の輝きと「美しさ」が失われて久しいけれど、僕たちは知ってはいないか。「こんな『青春』でない、別の『青春』がもつとほかのところにあるはずだ」「こんなばらばらな僕たちだけれど、そんな僕たちだけ

『信頼』できる友達がほしい」そんな願いと、言葉の持つ「美しさ」、言葉への信頼をとりもどす願いをこめて、……(略)……第一四回名大祭ははじまる。

(『第一四回名大祭パンフレット』)

僕たちの学問は、国民生活との関わりを無視しては考えられない。「何のために学ぶのか」という問いかけ。この学生としての僕たちにとつて最も真摯な問いに、「国民のための大学」という言葉をもつて、何らかの方向性が与えられはしないか。僕たちはそれを今年の名大祭でめざしたいと思う。学生に共通の基盤の一つは「真理を究める」ということだ。……(略)……しかし自分のまわりをながめてみると、その最も基本的な基盤さえ、今非常に脆弱なものとなつてしまつていることを感じる。……(略)……どう見ても将来への展望がわいてこない社会の現状。不公平と不正が横行し、強い者はあくまで強く、弱い者が徹底的にいじめぬかれる今の世の中、真理の存在すらが疑わしくなる日常の生活で、ともすればその日常に慣らされてしまいながら、それでも満足できず、僕たちは今確かなものを掴みたいと願つて……(略)……

(『第一九回名大祭パンフレット』)



名大祭フォークダンス風景（『第13回名大祭パンフレット』より）

これらのテーマアピールには、一九六〇年代のいわゆる高度経済成長期のなかで、受験競争社会をくぐり抜けてきた学生の真情が示されていると思われます。